速玉大社境内遺跡

熊野速玉大社礼殿建設工事に伴う発掘調査概報

1993. 3

財団法人 和歌山県文化財センター

序

紀州の南部に位置する熊野地方は、海・山・川の豊かな自然に育まれ、古来より神話と伝承に彩られた独特の文化を培ってきました。さらに、そのような背景から熊野三山信仰が現出し、信仰の対象として人々の関心を集めてまいりました。

今回、その熊野三山の一社である新宮市熊野速玉神社境内にて発掘調査を実施し、平安時代から江戸時代にかけて熊野三山信仰の歴史の一端を垣間見ることができました。本書が熊野三山信仰の歴史の究明に寄与することができれば幸いであります。

最後になりましたが、現地調査を実施するのにあたり、ご理解・ご協力いただきました関係者の方々には心より厚く御礼申し上げます。

平成5年3月31日

財団法人　和歌山県文化財センター
理事長　仮　谷　志　良

例　　言

1．本書は、熊野速玉大社礼殿建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概報である。

2．調査地点は和歌山県新宮市新宮1番地に所在する速玉大社境内遺跡で、調査面積は約270㎡である。

3．調査は宗教法人熊野速玉大社の委託を受け、和歌山県教育委員会および調査委員会の指導のもとに財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

4．調査に際しては、熊野速玉大社、新宮市教育委員会ならびに地元の方々の御協力を得た。記して感謝の意を表したい。

5．本書で使用した標高はT.P＋の数値で、北方位は磁北を示す。

6．発掘調査ならび本書の執筆・編集は、財団法人和歌山県文化財センター主任永光　寛ならびに技師村田　弘が担当した。

7．本調査で作成した記録類は財団法人和歌山県文化財センター、出土遺物は新宮市教育委員会歴史民俗資料館にてそれぞれ保管するものである。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅲ　発掘調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

　(1) 遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

　(2) 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅳ　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

図・図版目次

挿図1　周辺の遺跡 ・・・・・・・1

挿図2　基本土層図 ・・・・・・・2

挿図3　礼殿棟札 ・・・・・・・・5

挿図4　紀伊名所図会 ・・・・・・5

第1図　位置図 ・・・・・・・・・7

第2図　境内図 ・・・・・・・・・7

第3図　調査区全体図 ・・・・・・・・8

第4図　出土遺物実測図 ・・・・・・・9

第5図　享保度御造営建物総図 ・・・・10

PL－1　遺構検出状況・完掘状況

PL－2　本殿と調査区の位置関係・SK01

PL－3　SB04南北礎石据付穴列・礎石据付穴

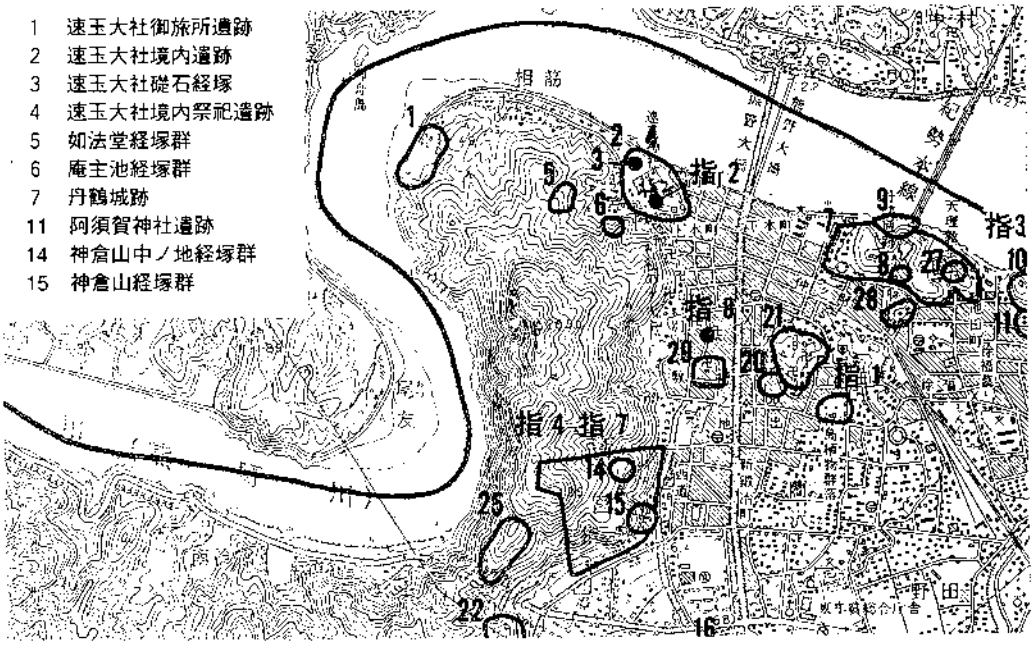
Ⅰ　調査の経緯

和歌山県新宮市新宮1番地に所在する熊野速玉大社では、礼殿（らいでん）の新築工事を行うこととなった。速玉大社境内ではすでに縄文土器が発見され、当センターが実施した発掘調査においても古墳時代～近世にかけての遺物が採集されている。さらに、正安元（1299）年完成といわれる『一遍上人絵伝』第3巻によると建設予定部分は礼殿の位置に相当することから、工事に先立ち建設予定部分の約270㎡の発掘調査を行うこととなった。

Ⅱ　環　　境

速玉大社は、和歌山県と三重県の県境を流れる熊野川の下流右岸、千穂ヶ峯（標高253m）の北東麓に位置し、那智大社ならびに本宮大社とならぶ熊野三山の一社で、俗に熊野新宮と呼ばれ、市民に親しまれている。

隣接する千穂ヶ峯を主峰とする権現山には、浄土信仰の隆盛に伴い、平安時代から鎌倉時代にかけて神倉山・庵主池・如法堂などの経塚群が築かれている。これらは、新宮経塚群と総称され、速玉大社とのかかわりの中で築かれたものと考えられるもので、古来より信仰の対象とされていたことがわかる。さらに、速玉大社境内遺跡は昭和33年の神宝館建設に際し縄文時代中期前半から後期後半にわたる土器が発見されたことにより縄文時代の遺跡として知られている。



挿図1　周辺の遺跡

周辺の遺跡には先述の経塚群のほかに、縄文土器が出土した速玉大社御旅所遺跡、弥生時代から古墳時代にかけての住居址が検出された阿須賀神社遺跡、弥生時代中期から後期のかけての土器片や石器ならびに奈良時代の須恵器片が採集されている宮井戸遺跡、速玉大社と阿須賀神社遺跡の間の丹鶴丘陵に築かれ丹鶴城と称される新宮城跡など熊野川の水運を中心に数多くの遺跡が古くから築かれてきている（挿図１）。

Ⅲ　発掘調査

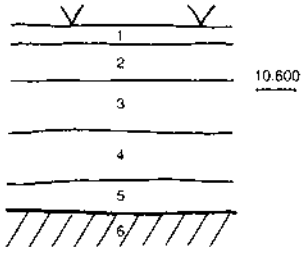
（１）遺　　構（第３図）

検出した遺構の総数は約480箇所で、現地表面から30～50cmの深さで確認した。調査区の層序は、基本的に６層に分かれる（挿図２）。第１層は表土で、第2層は暗褐色砂質土であるが、調査区全域には残存していない。第３層は褐色砂質土で江戸時代後半以降とみられる。第4層に黒褐色砂礫土、第５層に黒褐色砂質土が堆積するが、第５層も第２層と同様に調査区の一部にしか残存していない。第６層には黄褐色砂質土が認められ、遺物の出土が認められないことから地山と考えられる。また、調査区北壁では第２層と第３層ならびに第３層と第４層の間に薄い炭層が認められる。さらに第6層上面では、一部に被熱して赤色変化した焼土が一部で認められた。以上のように堆積土層の観察から少なくとも３回の火災跡が観察できる。

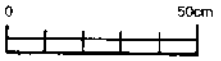
遺構の内訳は、①建物跡4棟を含む礎石据付穴160箇所以上、②溝状の遺構2箇所以上、③土坑１箇所以上、④ピット状遺構317箇所以上である。

主な遺構の概要は、以下のとおりである。

SB－01　棟方向東西の建物跡である。東半分の約１／２余りを検出した。確認した規模は、東西方向17.9m以上、南北13.8mを測る。南側に向拝がみられる。この建物の礎石はすべて抜き取られていたが、礎石据付穴および根石を20箇所で検出した。礎石据付穴は、方形の平面プランをもち、一辺約1.8m、深さが検出面より約0.95ｍである。この建物跡は、遺構の重複関係および出土遺物から造営の時期は江戸時代後半以降と考えられる。身舎と庇部からなるこの建物跡は、中央間が明らかになっているので、これを基準として復元すると、東西の桁行９間、梁行６間（約24.6m×13.8m）となり、３間（約9.7m）規模の向拝をもつものと推察できる。出土遺物は、土師器および染付である。



第１層　表土
第２層　暗褐色砂質土
第３層　褐色砂質土
第４層　黒褐色砂礫土
第５層　黒褐色砂質土
第６層　黄褐色砂質土（地山）



挿図2　基本土層図

SB－02　棟方向東西の建物跡である。規模は東西18.5m以上、南北10.0m以上を測る。礎石はすべて抜き取られ、礎石

据付穴および根石を22箇所で検出した。礎石据付穴は不揃いな平面プランをもち、一辺1m前後、深さは検出面より0.25～0.3mである。この建物跡は遺構の重複関係からSB－01より古く、時期は出土遺物から江戸時代中期18世紀以降である。この建物跡の規模は、中央間がSB　01とほぼ同じ位置にありながら、建物の東端が調査区内にとどまらずに東方に広がっている。したがって、SB－01より規模は大きいと推察される。出土遺物は、土師器および染付である。

SB－03　棟方向東西の建物である。規模は、13.7m以上、南北9.6m以上を測る。この建物跡の礎石はすべて抜き取られ、礎石据付穴および根石を15箇所で検出した。礎石据付穴は不揃いな平面プランをもち、一辺1m前後、深さは検出面より約0.25～0.3mである。この建物跡は、遺構の重複関係からSB－02より古い。出土遺物は土師器および山茶碗である。

SB－04　棟方向東西の建物である。規模は、東西11.6m以上、南北7.4m以上を測る。この建物の礎石はすべて抜き取られ、礎石据付穴および根石を11箇所で検出した。礎石据付穴は不揃いな平面プランをもち、一辺1m前後、深さは検出面より約0.25～0.3mである。この建物跡は、遺構の重複関係からSB－03より古い。出土遺物は、土師器および山茶碗である。

SK－01　調査区の東拡張区に位置する土坑である。直径は0.93×1.09m、深さは0.34mを測る。礫が円形に埋設されており、その中に椀が2杯以上埋納されていたものの、用途は不明である。

SD－01　東西方向の溝で、幅は0.27～0.4m深さは約0.35mを測る。遺構の重複関係から、SB03より古いことが明らかである。

SD－02　東西方向の溝で、幅は0.2～0.35m深さは約0.15mを測る。遺構の重複関係から、SB01より古いことが明らかであるが、他の建物跡との先後関係は不明である。

SA－01　直径20cm程度のピット状遺構8基が東西方向に並ぶ柵列である。遺構の重複関係からSB02より古いことが明らかである。

この他にも多数の礎石据付穴、ピット状遺構を検出しているものの、建物としてまとまらなかったため詳細は不明である。

(2) 出土遺物（第4図）

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ4箱ほどとさほど多くはない。また、大部分が表土および包含層からの出土であり、柱穴などの遺構からの出土はほとんどない。

時期的には、縄文時代後期のものと平安時代末から近世にかけてのものがある。以下に図示しえたものについて概略を記す。

（1）は柿釉の小皿である。口径10cmほどで、轆轤成形されており、内面から口縁端部外面にかけてニス状の透明釉がかかる。産地については不明だが、近世の遺跡から普遍的に出土する製品である。（2）は淡い白濁色を呈し、体部はほぼまっすぐに立ち上がり口縁端部は内

側に折り曲げ気味に押さえている。内面には施釉されていないことから、香炉など碗以外の器種である可能性も考えられる。おそらく瀬戸あたりの近世の製品であろう。（3）は蓋を伴う把手付の容器で、欠損しているが注口が付くものとおもわれる。口縁端部と外底面を除き、黄灰色の釉が施されている。（4）は瀬戸の鉢で、方口の付くタイプとおもわれる。体部上半から内面まで淡い草緑色の釉が付けがけにより施されている。（5）は褐釉の壺である。口縁上端部のみ釉を削りとっている。胎土はややパサついた黄白色の土で、瀬戸の製品とおもわれる。（6）は唐津焼の碗である。胎土は淡い赤茶色を呈し、全体に粗い白濁色の刷毛目の文様が施されている。（7）（8）はともに伊万里の染付の碗である。体部外面に草花文が描かれており、いわゆるくらわんか茶碗と称されている製品である。（9）（10）はいずれも灰色を呈した磁器の壺の底部で、丸く立ち上がった体部に長い頸部の付くタイプとなるものである。

（11～14）は土師質の皿である。このうち（11）は大きく外反する器形で、肌色の色調を呈している。その他のものは、内彎気味に立ち上がるもので、黄白色を呈し、胎土は比較的よく精選されている。当地方における土師質皿の編年作業は進んでおらず、不明の部分が多いが、他地域の類例から推して14・15世紀の製品と考えて大過ないものと思われる。なお、図示しえなかったが土師質皿には底部に糸切の痕跡の残っているものもいくつか散見した。これらは、一時期古く、12世紀後半から13世紀前半の可能性があろう。

（15～25）は山茶碗である。胎土はいずれも砂粒を含むなどやや粗く、均質手・荒肌手に分類した場合、荒肌手に属するものと思われる。小破片であるため、時期を限定するには困難をともなうが、高台部のつくり、口縁部の形状から推して第Ⅱ段階後半から第Ⅲ段階の前半、実年代で言えば12世紀後半から13世紀前半の製品と考えられよう。とくに（15）（16）など器壁が薄く、シャープなつくりであり、確実に12世紀代にはいるものと思われる。山茶碗については、県北部では高野山などの例外を除けばほとんど出土しない遺物であり、その意味でも当地方と東海地方の結びつきを物語る好資料といえよう。逆に、この時期に県北部では普遍的な遺物である瓦器碗は、今回の調査ではごく少量しか出土していない。

（26）は灰釉の壺である。頸部に二条の沈線が施されている。（27）は中国製の白磁の皿である。口縁端部が外反するもので、16世紀初めの製品と考えられる。（28・29）は中国製の青磁の碗である。このうち（28）は輪花の碗で、13世紀末から14世紀初めのもの、（29）は体部を欠くが無文ないしは劃花文となるものと思われ、14世紀の製品である。（30）は瀬戸の灰釉の小碗である。淡い緑色を呈し、体部はほぼ直立気味に立ち上がる。（31）は瀬戸の天目茶碗である。

（32～34）は縄文土器である。今回の調査で検出した遺構とは直接的に結びつくものではないが、速玉大社境内遺跡は縄文時代の遺跡としても周知されており、これまでの調査でも縄文土器は数多く出土している。いずれも縄文時代後期前葉のもので、（32・33）は中津式、（34）は福田KⅡ式と考えられる。器形は深鉢になるものと思われる。なお、縄文の撚りはL

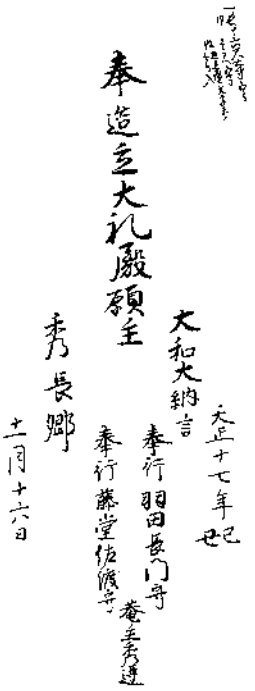
Rである。

その他の遺物としては、銭がある。大部分が寛永通宝であるが、熙寧元寳・祥府元寳などの北宋銭も出土している。

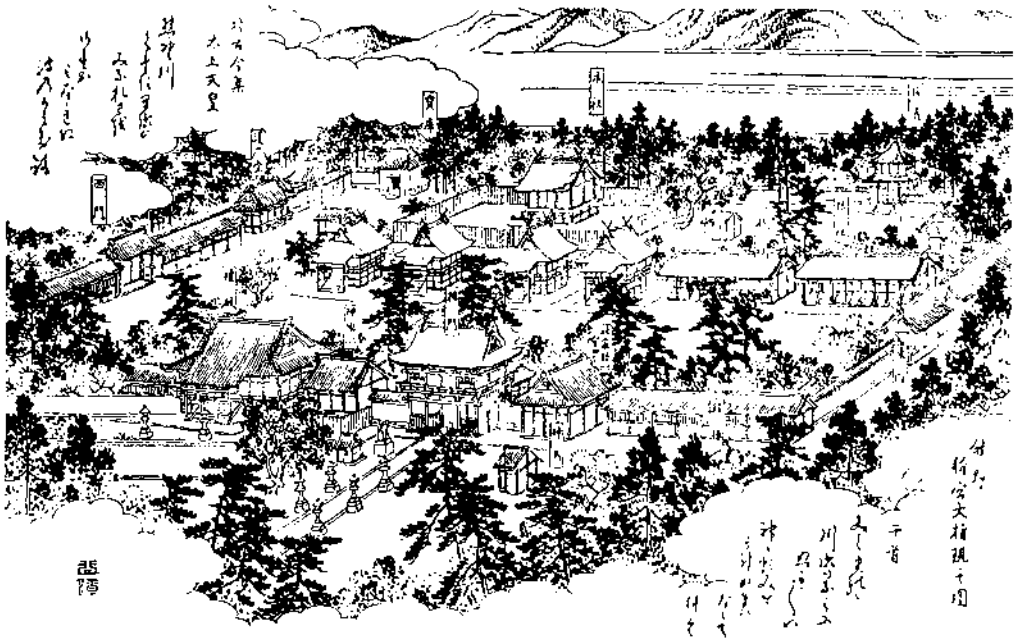
Ⅳ まとめ

以上の成果と現在残されている文献史料や絵図とを照合すると、次のように考えられる。

① 今回発掘調査を実施した地点は、「一遍上人（聖）絵伝」、享保・嘉永年間の『御造営建物総図』、『紀伊名所図会』（挿図4）、『紙本著色新宮本社末社図』などから推定すると、まさしく速玉大社本殿に正対した『礼殿』の位置に相当する。『礼殿』とは、熊野三山特有の施設で全国に類例がないとされ、いまひとつ発生およびその系譜ならびに性格が不明瞭であるが、神仏習合の中で、拝殿としての性格をもち、また仏教的、修験道的色彩も持ち合わせていたようである。いずれにせよ、本殿以外の施設の中では、最も重要な儀式殿であったようである。さらに、『梁塵秘抄（口伝集）』に「新宮に参りて奉幣す。（略）礼殿にして通夜千手経を誦み奉る。（後白河法皇）」（応保2年2月12日・1162年）とあり、速玉大社礼殿の様子が記述されていることから、平安時代末にはすでに造営されていたと考えられる。



挿図3　礼殿棟札

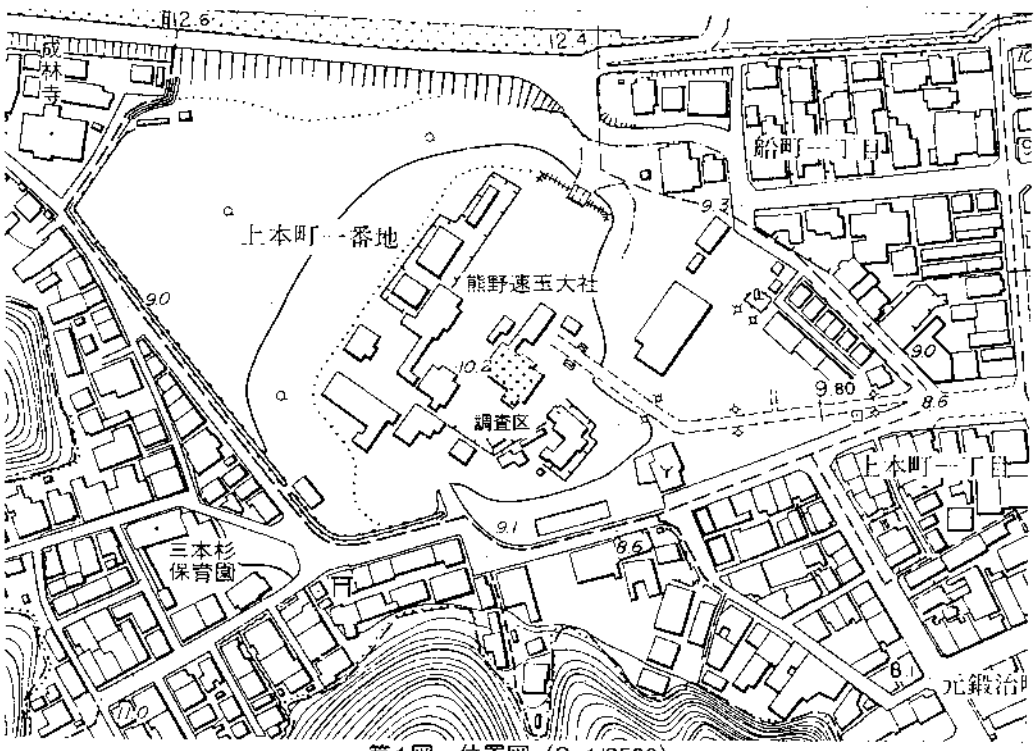


挿図4　紀伊名所図会

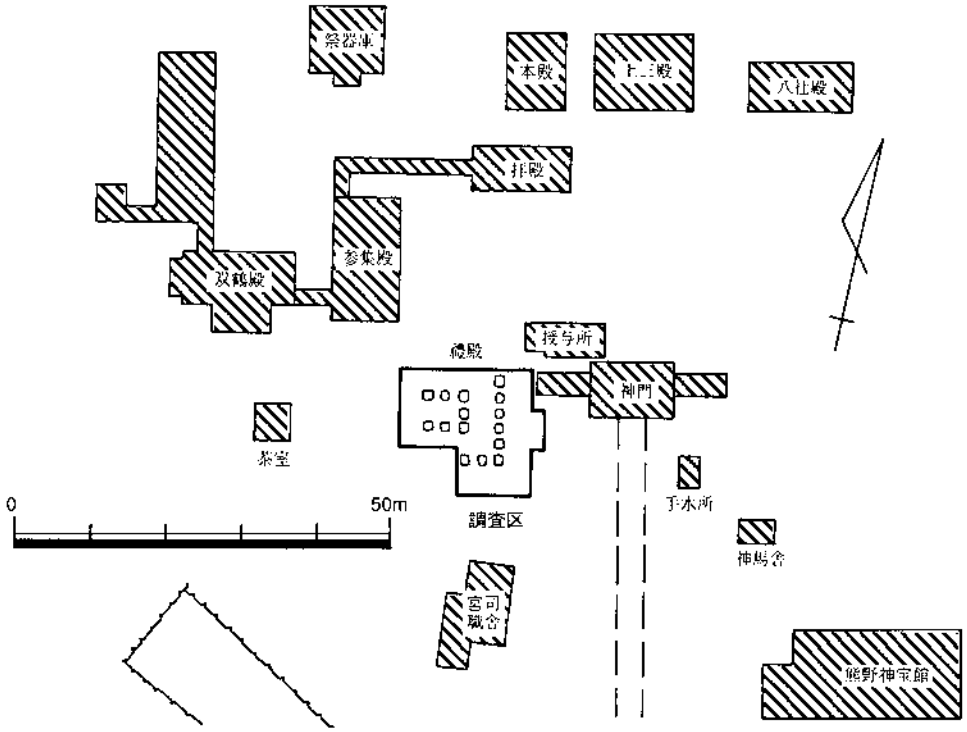
② 礼殿跡と考えられる遺構は、規模が推定できるものが4棟、それ以外にも礎石据付穴が確認できることから、それ以上の建物の存在が想定される。時期は、出土遺物を参考にすると、12～13世紀を上限として江戸時代末までの間に限られる。

③ 検出した4棟の建物跡は、発掘調査の成果と上記の史料を併せて考えると、SB－01が『嘉永度御造営建物総図・1853（嘉永6）年』の建物規模（約24.6m×約13.8m）に合致する。この建物は、1883（明治16）年に熊野（新宮）川で打ち上げられた花火により焼失したもので、その外観は『紙本著色新宮本社末社図』にみることができる。SB－02は、『享保度御造営建物総図・1732（享保17）年』（第5図・約39.4m×約26.6m）に相当する。SB－03は、梅本家文書にある棟札（大札殿・挿図3）の写しから1589（天正17）年に造営されたもの比定できる。SB－04はこれらより遡り、室町時代に造営されたものと考えられる。ちなみに『熊野新宮社殿門塔並鳥居橋間数』では天正以前の建物の規模を約25.6m×約13.8mとしている。

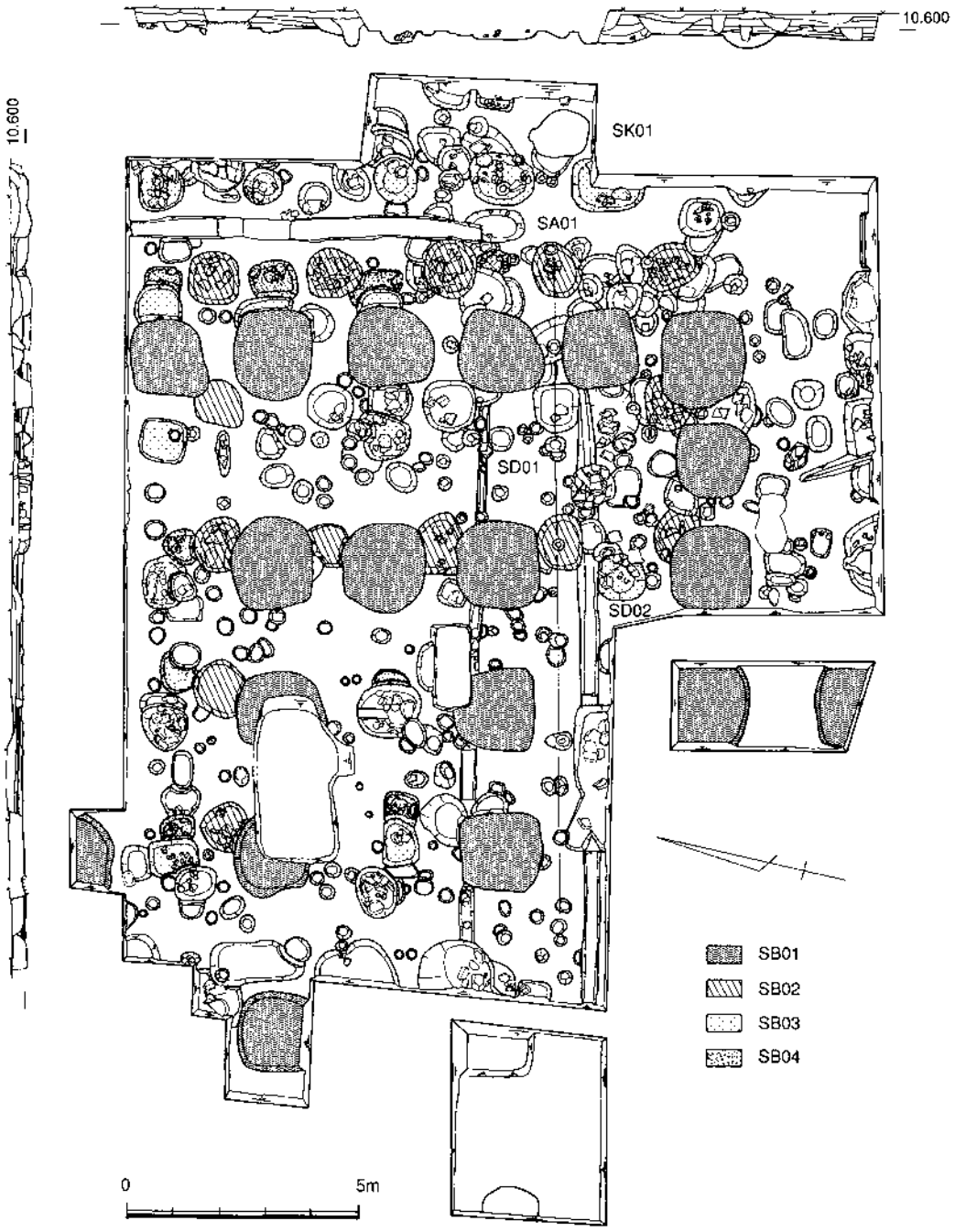
④ これらの4棟の建物は、中心部（中央間）がほとんど同じ位置を占め、棟方向もほぼ同じ方位である。したがって、同一場所に繰り返し造営されたことが特徴的であるといえる。ただし、調査区南東端に位置する礎石（0.9m×0.6m×0.4m）は唯一遺存しているものであるが、出土遺物から鎌倉時代以前のものと推察される。この礎石位置は、上記4棟の建物跡から少し南にずれており、これが礼殿の一部であれば、中世以前の建物は少し位置を異にする可能性が考えられる。



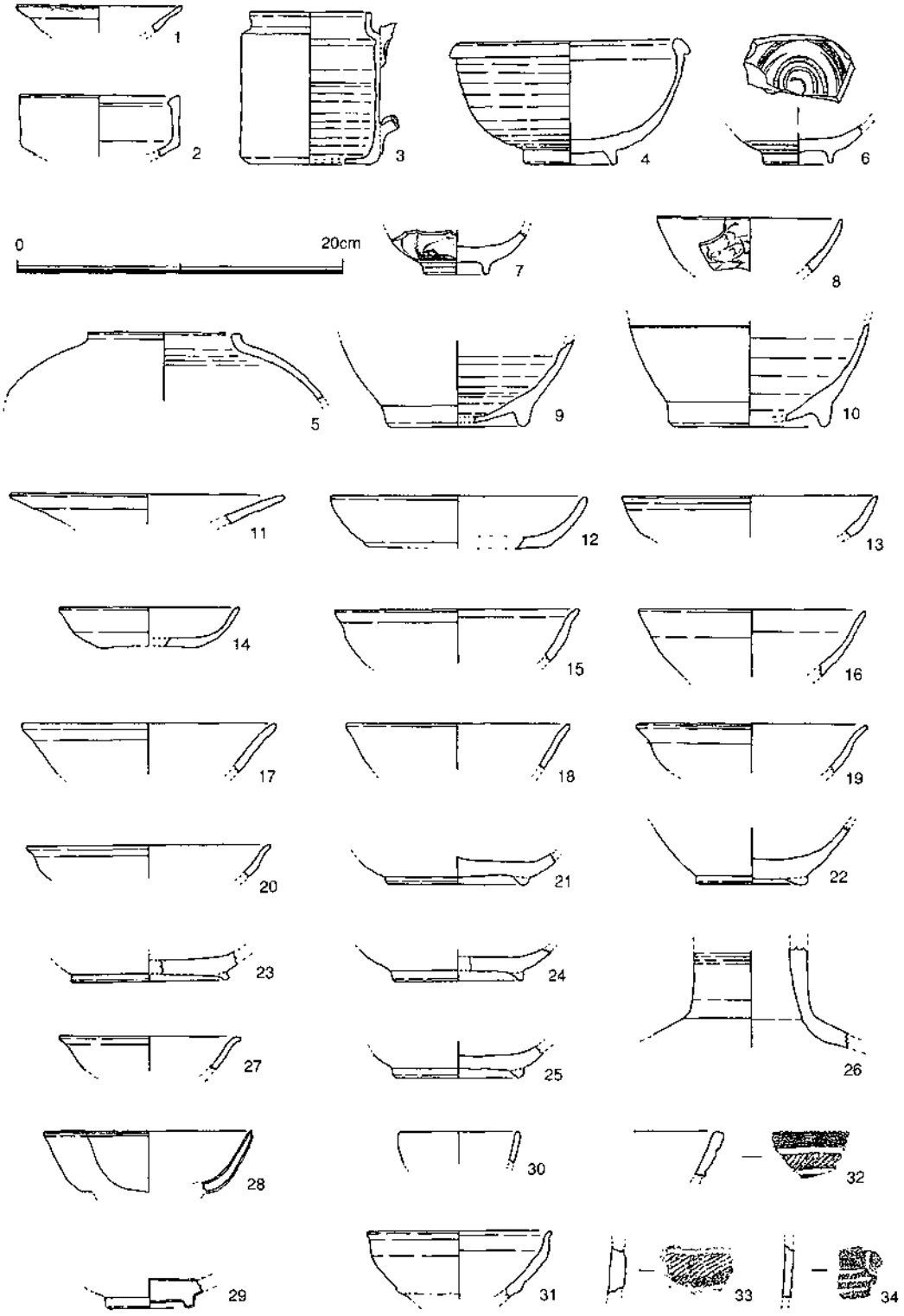
第1図　位置図（S=1/2500）



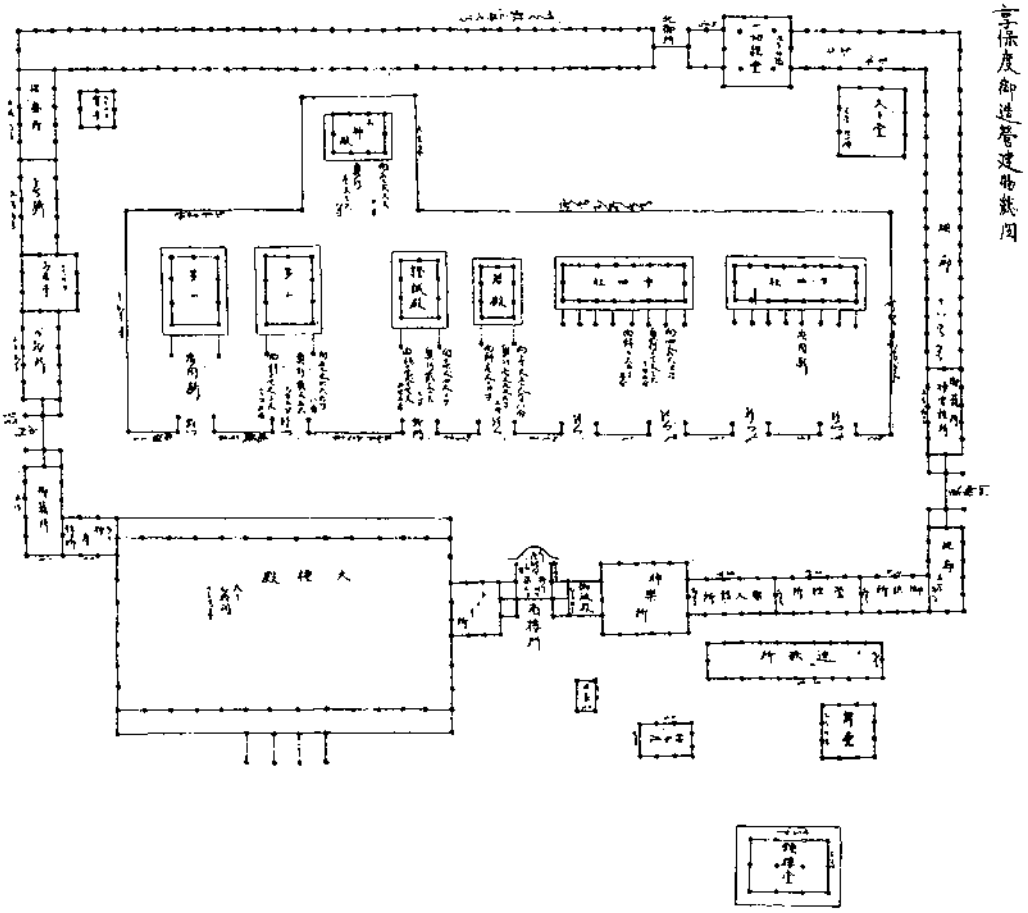
第2図　境内図（S=1/400）



第3図　調査区全体図（S=1/150）



第4図　遺物実測図（S=1/4）



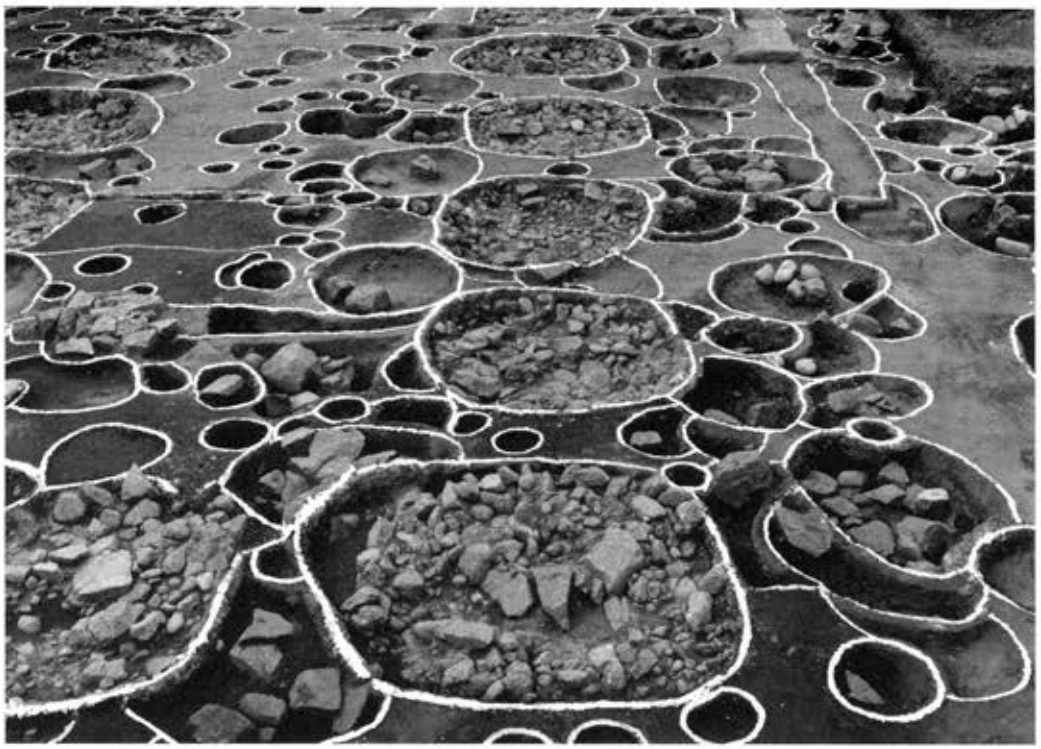
第5図　享保度御造営建物総図

遺構検出状況

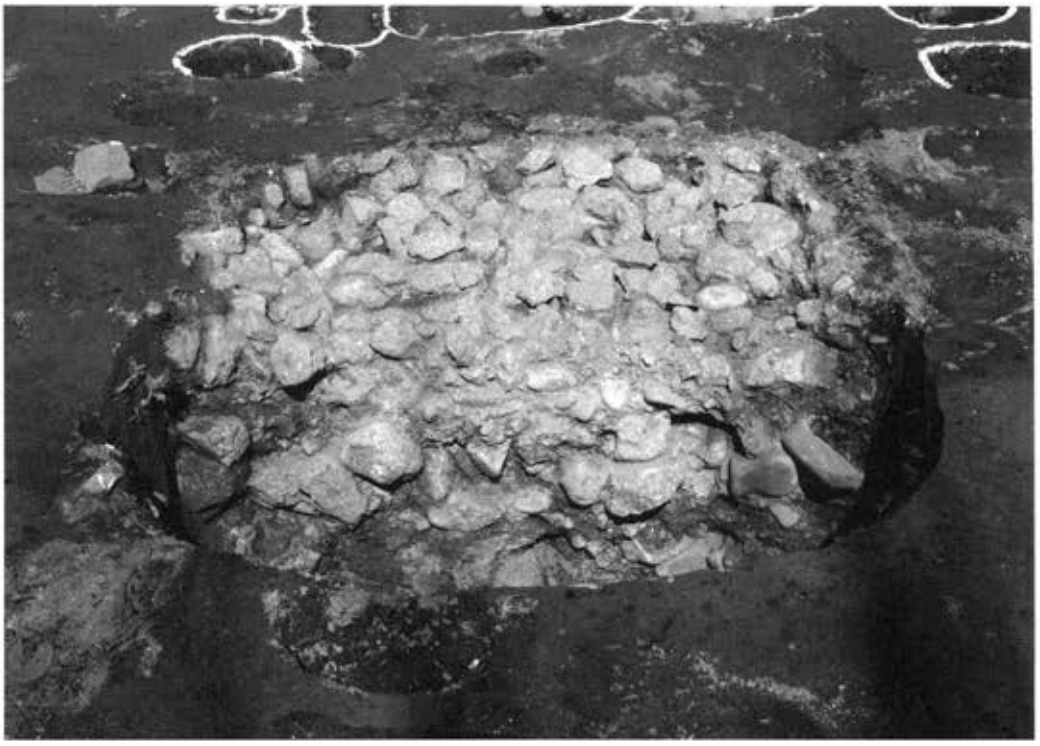
完堀状況

本殿と調査区の位置関係

SK01



ＳＢ04南北礎石据付穴列



礎石据付穴

速玉大社境内遺跡

熊野速玉大社礼殿建設工事に伴う発掘調査概報

1993年3月

編集・発行　財団法人和歌山県文化財センター
印　　刷　西岡総合印刷株式会社